

会津藩家老山川家の明治期以降の足跡

—— 次女ミワの婚家・桜井家の記録から ——

遠藤 由紀子

The Way of Living after the Meiji Era of the Chief Retainer of the Aizu Domain

Yamakawa Family Who is the Loser of Boshin War

— Record of the Sakurai Family Who Got Married to the Second Daughter Miwa —

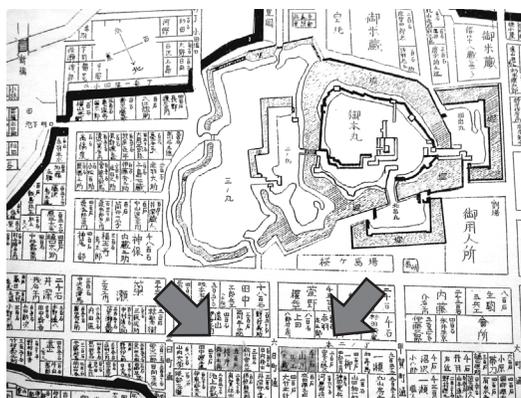
Yukiko Endo

Yamakawa was the chief retainer of the Aizu Domain at the end of the Edo Period. The Yamakawa family comprised seven siblings, of whom the first son Hiroshi, second son Kenjiro, and fifth daughter Sutematsu were famous. This paper clarified the life of the second daughter Miwa that has remained unknown to date. Miwa moved to the border of the Shimokita Peninsula when the Aizu Domain was reconstructed as the Tonami Domain after the Boshin War. Her husband Masaei Sakurai worked as the principal of an elementary school. In 1886, all members of her family settled in Nemuro as a colony because her first son Yasuhiko was recruited as militia settlement. Miwa delivered five sons and five daughters. As she was education-obsessed, she sent most of them to Tokyo from Nemuro and let them live in the Yamakawa family home as students. All brothers and sisters of the Yamakawa family maintained harmonious relations and supported each other well into adulthood. Miwa was an ideal, dutiful wife and devoted mother who always stayed with her husband and educated her children over the course of her lifetime, though she taught sewing at one time in her life.

1. はじめに

会津藩の家老であった山川家の屋敷跡（地図1）は鶴ヶ城に程近く、現在「^{すてまつ}大山捨松生誕の地」（福島県会津若松市城前）の案内板¹が建っている（写真1）。案内板には、捨松の経歴と兄である山川^{ひろし}浩（旧名^{おおくら}大蔵）、山川^{けんじろう}健次郎のことが紹介されている。山川家の3兄妹しか紹介がないが、3兄妹の他に山川家には^{ふたば}二葉、^{みさお}ミワ、^{ときわ}操、常盤^{ときわ}がおり、実際には

1 かつて、「山川三兄妹誕生の地」という案内板が、「山川大蔵生誕150年」を記念し、宮泉酒醸会津酒造歴史館前（福島県会津若松市東栄町）に平成6年（1994）より建てられていたが、平成25年（2013）のNHK大河ドラマ「八重の桜」放映を機に屋敷跡地が再調査、微修正され、現在地に整備された。



地図1 会津城下町（鶴ヶ城と武家屋敷）（左矢印が桜井家、右矢印が山川家）（鶴沢佳子氏提供）



写真1 大山捨松生誕の地
平成29年（2017）9月19日筆者撮影

7人の兄弟姉妹であった。

浩（長男、生没年1845～1898年）は、慶応2年（1866）に幕府の使者に同行してロシアへ渡航した経験があり、幕末の京都でも活躍、会津戦争時には家老職を拝命していた。籠城戦では、小松彼岸獅子のお囃子を率いて縦隊を組み、長州藩と大垣藩の前を堂々と行進し、傍観した敵を欺くという意表をついて入城に成功した「智将」として知られる。会津開城後、明治3年（1870）、斗南藩として再興となり、1万7千人もの会津藩士が下北半島付近に移住したときは、藩の大参事となみを勤めた。廃藩置県後は、陸軍に出仕し佐賀の乱、西南戦争で活躍し、陸軍少将となった。明治18年（1885）には、森有礼の命により東京高等師範学校長、東京女子師範学校長を歴任し、明治23年（1890）に貴族院議員に就任している（桜井1967、桜井1974等）。

会津戦争中、白虎隊に入隊していた健次郎（次男、生没年1854～1931年）は、明治4年（1871）にアメリカへ国費留学をし、イエール大学で物理学の学位を取得し帰国する。明治21年（1888）、東京帝国大学初の物理学博士号を授与された。のち、明治34年（1901）に東京帝国大学の総長となり、九州帝国大学、京都帝国大学の総長を歴任した。学校の設立にも多く携わり、明治の教育を切り開いた（星2003、大竹他編2013等）。

会津戦争時8歳であった咲子さきこ（五女、生没年1860～1919年）は、明治4年（1871）、開拓使募集の岩倉使節団の女子留学生となり、「捨てたつもりで待つ」＝捨松と改名され、11年間のアメリカ留学を経験する。明治15年（1882）に帰国し、翌年、旧薩摩藩士・陸軍大将の大山巖夫人いわおとなり、鹿鳴館の貴婦人と謳われた。看護学校や篤志看護婦人会の発足に関わり、明治33年（1900）に設立した女子英学塾（同じく女子留学生であった津田梅子が創立、現津田塾大学）の支援を行うなど、社会福祉事業や教育活動に尽力した（久野1993等）。

このような経歴から三人がいかに著名であるかが分かる。筆者は、かつて二葉（長女、

生没年1844～1909年)を調査したことがあった²。二葉は、幕末に会津藩家老梶原平馬に嫁ぎ、一人息子となる景清を儲けたが、平馬と別れ、明治10年(1877)より東京女子師範学校の舎監・教諭として30年近く奉職した。二葉についての資料は、『女學雑誌』や『太陽』への寄稿や追悼集などに散見することができる³。

操(三女、生没年1852～1916年)は、明治4年(1871)に旧会津藩士小出^{こいでみつる}光照に嫁ぐが、明治7年(1874)の佐賀の乱で未亡人となり、明治13年(1880)5月にロシアに留学⁴、明治17年(1884)2月より宮内庁に入り昭憲皇太后に仕えた経歴を持ち、『婦人世界』などに寄稿をしている⁵。

常盤(四女、生没年1857～?年)は、明治になり山川家の書生であった旧会津藩士^{とくりき}徳力徳治に嫁いだ。徳力は司法省に勤め、検事総長となった。後、山川に改姓している。同じく山川家の書生で陸軍大将となった柴五郎の回顧録『ある明治人の記録』⁶には、常盤の逸

- 2 拙著(遠藤2010)にて詳解した。その他、一般書では『八重と会津戦争』(洋泉社、2012年)、『新島八重と幕末会津を生きた女たち』(新人物文庫、2013年)に二葉の生涯を寄稿、『福島民報』の特集「ふくしま人」にて「山川二葉」を連載(2013年5月4日、5月11日、5月18日、5月25日、6月1日付掲載)した。
- 3 二葉は『女學雑誌』(第389号、第390号、第391号、1894年)に「會津城の婦女子」、『太陽』(第3巻23号、1897年)に「寄宿生の薫陶」を寄稿している。また、死の翌年に教え子たちが追悼集『山川二葉先生』(黒川龍編、櫻蔭会、1910年)をまとめている。孫の梶原景浩による遺稿集『會津の人』(八重岳書房、1980年)にも祖母二葉の逸話が残る。
- 4 ヨーロッパ各国の王室制度の調査の特命全権大使としてロシアへ赴任した柳原前光(大正天皇生母・柳原愛子の兄、歌人・柳原白蓮の父)の夫人初子の世話役として同行した。2年間、ロシアに滞在し、フランス人ロールネールに従ってフランス語を学んだ(今泉2014:159)。
- 5 操は『婦人世界』(第4巻第8号、1909年)に「十七歳にて會津籠城中に實驗せし苦心」を寄稿している。また、子どもがいなかった操には養子がいた。一人は、ミワの次女ヤエで後述するが、もう一人は、明治41年(1908)に山川^{しずか}黙(生没年1866～1966年、東京出身、河田然二男)が養子となった。黙は、旧制武蔵高校の4代校長(在1942～1946年)を勤め、日本山岳会(旧日本博物同志会)を創始した。健次郎も武蔵高校の2代校長(在1926～1931年)を勤めたことがあり、その縁と思われる。黙は、子爵久世通章の長女三千子と結婚した。三千子は結婚前、宮内庁に勤めており、晩年に『女官』(実業之日本社、1960年。2016年に講談社学術文庫で再版)を出版し、宮中出仕中の出来事を赤裸々に著している。そのなかに姑である操の話も登場する。操ははじめ御用掛として任用され、フランス語の「お通弁」をしており、小石川にある自宅から御用の時だけ出勤していた。例えば、昭憲皇太后の洋服の形を考えるため、フランスから送られてきた洋服のカタログの翻訳をする仕事(山川2016:21)をした。また、明治天皇からも信頼されており、日露戦争中に明治天皇、昭憲皇太后の使いとして広島病院に見舞いに行くよう直接沙汰されたことや、天皇より直接「おい操、伊藤(博文)にしゃくをしてやれ。」といわれ、いささか憤慨したが酒の席でのお戯れであった(山川2016:48)、などの逸話が残る。明治33年(1900)には権掌侍の位となった。明治天皇が崩御し、大正2年(1913)11月に依願免官した。ところで、黙が操の養子となったことは、山川家側の子孫にはあまり認識されておらず、操の養子といえはやエだけだと伝わっていたようである。武蔵学園の沿革をみると、4代校長として「山川操養子」と経歴が明記され、黙は長男重一、次男重次を儲けたらしいが、現在、操の位牌は桜井家で祀られている。
- 6 柴五郎(生没年1859～1945年)から託された「遺書」を編者石光真人がまとめ、昭和46年

話が度々登場するが、それ以外の資料に接することは出来ない。また、常盤の長男^{こるとん}戈登は浩の養子⁷となったが、東京帝国大学在学中に死去した。

本稿では、輝かしい経歴を持つ兄弟姉妹たちとは裏腹に、これまで全く詳細な生涯が知られていなかった⁸ミワ⁹（次女、生没年1847～1932年）に焦点をあて調査した。ミワ自身による雑誌への寄稿はなく、日記なども残されていない。本論文では、ミワの曾孫にあたる鶴沢佳子氏より拝借した史料（資料）¹⁰を軸に、ミワの周辺の人物、特に夫桜井政衛と四男桜井懋^{つとむ}の記録を探った。主に政衛と懋の経歴¹¹を詳解することになるが、ミワの家族構成、生活した場所・環境など、戊辰戦争を経て明治期以降の展開について、ミワに関わりのある出来事を少しでも明らかにしたい。（家系図、表1）

（1971）に中公新書として出版した。少年時代に経験した戊辰戦争から西南戦争までを回想した記録であり、壮絶な環境を耐え忍ぶ姿は東日本大震災（2011年）でも注目され、多くの反響を呼び、現在でも再版を重ねている。

- 7 浩の妻登勢は籠城戦で砲弾を浴びて戦死しており、その後内縁の妻として西郷家出身の某女や志づ（男子洗が出生、明治39年（1906）にアメリカで客死）がいたらしいが、明治11年（1878）頃、池谷金五郎の娘伸と再婚した（中村2000：229～231）。山川家の本家である浩の養子には、明治43年（1910）に亡くなった戈登のあと、戈登の遺言で弟廉が養子となったが大正2年（1913）に急死、その後、健次郎の四男建が養子となった（尚友倶楽部編2014：233）。ちなみに、戈登とは明治15年（1882）に御坊・中野家へ送った浩の礼状によると浩が筆名にしていた時期もあり、自身が尊敬するイギリスの軍人チャールズ・ゴードンが由来だといわれる。
- 8 これまで、ミワに関わる史料（資料）が少ないため、山川家の兄弟姉妹について、ミワは名前の記載のみの文献が多かった。そのなかで、例えば山川健次郎顕彰会（会津武家屋敷内）では「次姉の美和（美和子）は桜井政衛と結婚……（政衛は）青森上北郡の二つの小学校で主座教員を務めた後、北海道に渡り函館を経て根室に行き荒野の開拓に力を注いだ、病に冒されて亡くなった。根室には、かつての義兄・梶原平馬も住んでいた。恐らく政衛の根室行きは、平馬の誘いがあったのではなかろうか。美和は夫を理解し、苦難のなかで彼の生涯を支えた。美和の会津、斗南、北海道の函館、根室へと、流転の生活に耐えた芯の強さに典型的な会津女性の生きざまを見る思いがする。」（大竹他編2013：13～14）と紹介されている。
- 9 三輪・三和・美和などの表記もみられるが、本稿では戸籍にある「ミワ」と表記する。
- 10 ミワの四男桜井懋による「桜井家の記録」（1968年8月上旬、私家版、懋の甥（五男幹久次男）の桜井国雄氏が翻刻）、「吾が家の記録と吾がたどった途」（1968年10月16日、私家版、原本を筆者翻刻）、戸籍謄本、鶴沢氏からの聞き取り・手紙。「桜井家の記録」を私家版A、「吾が家の記録と吾がたどった途」を私家版Bと表記する。懋は伯父となる浩の伝記『山川浩』（1967年、私家版）、『続山川浩』（1974年、続山川浩伝刊行会）をまとめている。尚、平成28年（2016）に『山川浩』として歴史春秋社より合本復刻した。他に、会津図書館に所蔵されている『補遺（未定稿）山川健次郎博士遺稿』（1969年、私家版）なども著している。鶴沢氏は、昭和21年（1946）満州生まれ、懋の長女京子の娘にあたり、晩年の懋が認めた原稿を清書することもあった。
- 11 政衛と懋については、これまで本田克代氏の調査（本田1999）があった。桜井国雄氏からの資料によるもので、桜井家の来歴や政衛と懋の経歴が簡潔に示されている。ミワに関する記述は200字足らずで、五男幹久には少し触れているが、他の子女についての詳しい記述はなかった。また、懋は山川健次郎の「遺稿」7冊の編纂をしており、「遺稿」を調査中の小宮京氏による懋の追跡（小宮2016）もあるが、ミワに関しては懋の母としての記述のみであった。

家系図

【ミワに関する家系図】
 ★は本論文で直接聞き取り調査をした方
 ☆は間接的に情報を得た方

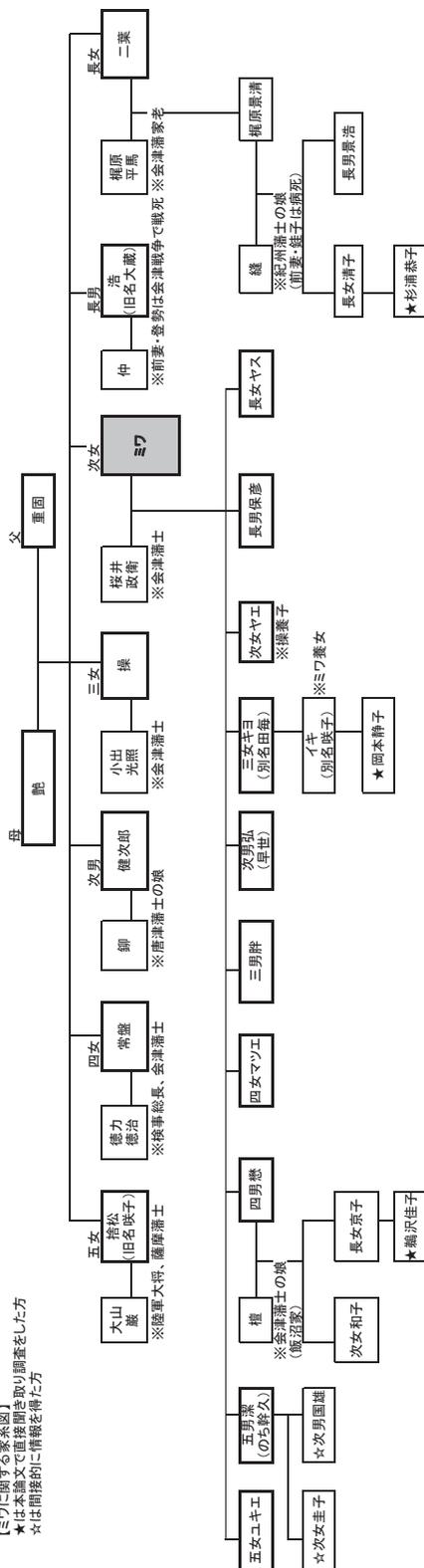


表 1 ミワの子ども

続柄	名前	出生日	ミワの出産年齢	上京先	ミワより先に亡くなった年	女子の嫁ぎ先
長女	ヤス	慶応元年 (1865) 11月11日	18歳	浩邸の書生		田中館氏に嫁ぐ
長男	保彦	明治元年 (1868) 7月2日	21歳	浩邸の書生	大正4年5月1日死去 (享年47歳)	操養女、鶴田氏へ嫁ぐ
次女	ヤエ	明治6年 (1873) 7月7日	26歳	操邸の書生		鈴木氏へ嫁ぎ、離婚
三女	キヨ (田毎)	明治8年 (1875) 12月19日	28歳	(旭川の産婆学校)		角田氏へ嫁ぐ
次男	弘	明治11年 (1878) 4月8日	31歳	浩邸の書生	明治11年5月17日死去 (享年1歳)	
三男	胖	明治12年 (1879) 9月4日	32歳	操邸の書生	明治28年8月20日死去 (享年16歳)	
四女	マツエ	明治15年 (1882) 5月12日	35歳	健次郎邸の書生		
四男	懋	明治20年 (1887) 10月16日	40歳	浩邸の書生		
五男	潔 (幹久)	明治21年 (1888) 12月10日	41歳	浩邸の書生		
五女	ユキエ	明治27年 (1894) 10月17日	47歳		大正7年6月2日死去 (享年24歳)	猪狩氏に嫁ぐ
養女	イキ (咲子)	明治35年 (1905) 5月1日	三女キヨの子			猪狩氏後妻

(鶴田佳子氏による資料をもとに筆者作成)

2. 戊辰戦争から斗南藩へ

山川家（1000石）に生まれた7人兄弟姉妹の父は山川^{なおえしげかた}尚江重固、母は艶^{えん}（歌号・唐衣、西郷十郎右衛門近登之の娘）であった¹²。山川家は、もともとは会津藩初代藩主となる保科正之の高遠以来の家臣（200石）であるが、高禄の家柄ではなかった。7人の兄弟姉妹の祖父にあたる山川^{ひょうえしげひで}兵衛重英が目付、普請奉行、町奉行等を経て、勘定奉行に就任し、困窮した藩財政を再建した功績が認められ、若年寄となり、天保10年（1839）に家老に昇格、20年間藩政の中心を担ったことで名門となった。安政6年（1859）に尚江が家督を継いだ¹³が、翌年に死去する。遺児7人を抱えた艶は剃髪し、兵衛と共に子らの教育に力を注いだ（中村2000：13~14）。

ミワは、3歳上の二葉（長女）、2歳上の浩（長男）に次いで、弘化4年（1847）11月11日、山川家の次女として誕生し、文久3年（1863）6月11日、会津藩士桜井家（500石、物頭）¹³の長男政衛に嫁いだ。3歳年上（弘化元年（1844）生）の政衛は、結婚前、江戸勤番を経て、文久2年（1862）に京都守護職に任命された会津藩主松平容保^{かたもり}に従い、京都に赴いていた。結婚後も、元治元年（1864）の禁門の変（蛤御門の変）に参加、孝明天皇の御大葬では御出門の警護の任にあった（私家版A）。

慶応4年（1868）年1月3日、政衛は鳥羽伏見の戦いに参戦、2月に会津に帰った。4月、朱雀隊の二番隊足軽隊長に任命され、総野の戦いに参加、宇都宮の攻略に尽力する。閏4月26日には、義兄である日光口総督山川浩（当時、大蔵）の指揮下に属し、野州今市の攻略戦に参加した。7月27日、二本松藩の救援に赴き、本宮口の戦いに加わるが、激戦の末、二本松は落城となり、政衛は腹部貫通の銃創の重傷を負って会津に帰還した（私家版A）。戸籍によると、ミワはこの間、慶応元（1865）年11月11日に長女ヤス、慶応4年（1868）7月2日に長男^{やすひこ}保彦を出産しており、政衛は京都と会津を何度か往復していたことが分かる。

8月23日、会津城下まで新政府軍が迫り、警鐘が鳴った。会津藩では藩士の家族に対し、万一危急が迫れば警鐘を鳴らし、それに応じて入城するよう布告していた（豊田他監1966：172）。重傷を負った政衛は自宅療養しており、家族に援けられて槍を杖き城に向かったが、すでに城門は閉鎖され入城できず、若松南方雨屋に向かい、従者の家で療養した（私家版A）。桜井家に嫁いだミワは、政衛と行動を共にしたと思われ、籠城戦に参加しなかった。もっとも生後2か月に満たない乳児を抱えながらの籠城には無理があったで

12 艶は12人を出産したが、5人は夭逝している。

13 桜井家の初代は尾張出身で、加藤嘉明の近臣となり文禄の役で功を挙げた。後、京極忠高、松江藩を経て、保科正之に仕えた。正之の会津入りに伴い、物頭（足軽50人、鉄砲50挺）となった。桜井家の通り名は「弥一右衛門」で、政衛は9代目である。叔父（父政思の弟）に土津神社の宮司であった桜井豊記がいる（私家版A）。

あろう¹⁴。籠城戦は1か月続き、兄弟姉妹の無事を願うミワの胸中が察せられる¹⁵。

同年9月、政衛は二番寄合隊頭、軍事奉添に任命され、家老萱野権兵衛の指揮の下、田中蔵人隊の別選組頭となり、城外の越後口の守備にあたらしいが、詳しい事は伝わっていない。9月22日、会津開城となり、城外で転戦していた会津藩士は塩川村に幽閉となった。越後高田藩へのお預けが決まると、翌年1月、1700余名が「会津降人」として送られ、40数人単位で50数か所の寺に分散収容され、謹慎した(星1990:107)。政衛もこれに従った(私家版A)。一説では、本誓寺中本浄寺または本誓寺中長楽寺にて謹慎したという(本田1999:23)。

謹慎生活は自炊であったが「時間的な余裕が与えられていたので、茶の湯とか歌の会などが頻りに催され、後には経書の講義なども始められた」(阿達1984:55)といわれる。旧会津藩の責任者は家老上田学太輔で、上田の命で旧会津藩学問所も開設された。南摩綱紀^{南摩綱紀}^{のり}¹⁶を講師とする漢学所で、30名ほどが午前は大学、午後は詩経を学んでいた(星1990:109~110)。

越後高田藩で謹慎生活を送った旧会津藩士十倉新八^{とくらしんぱち}の伝記には、謹慎中に「新八は大変勉強が好きであり、約20人の学習生を集め、漢学塾を設け、南摩八之丞(綱紀)先生を師と仰ぎ、桜井弥一右衛門(後政衛)を塾長として学習に励んだ。」(田澤他2001:31、括弧内は原文による)とある。時々学生に紛議が起こると、政衛に「貴殿、和解の労を取り給え、南摩先生の耳に入ると厄介だから」(田澤他2001:31)といわれたという。旧会津藩学問所と漢学塾が同じものか、記述から判然としないが、政衛は漢学塾の塾長をしながら謹慎生活を送っていたことが分かる。

明治2年(1869)11月、斗南藩¹⁷としての再興が決まり、翌年春より旧会津藩士は下北

14 二葉(長女)の長男景清は2歳であった。二葉は城内へ連れて行こうとしたが、乳母は子どもだけは預かりたいと懇願。二葉は「乳母にやっしまえば、百姓として一生を終わらねばならない。それより城内へ連れて行って、自分と共に死んだ方が子どものためにも幸福だ」といい、承知しなかった。そこで、乳母は景清を背負って二葉に付いて城へ向かったが、途中で姿を隠した。気付いた二葉はひどく驚いたらしいが、結果、景清を乳母に託す形で自身だけ入城した(山川1909:35)。

15 ミワ以外の兄弟姉妹(6人)は籠城した。籠城中の女性は、兵糧の握り飯を作り、負傷者の看護、砲弾の火消しを行なった。家老職の家柄の女性たちは率先して働き、模範となるよう努めた。特に、山川家出身の女性は、怪我をして体が不自由になるよりも死を望むとし、誰かが重傷を負った時には、武士の道にならって首をきりおとすことを約束しあっていたという。常盤(四女)は10歳、咲子(捨松、五女)は8歳でまだ幼く、二葉(長女)は母艶に「万が一の時、一人は私が刺し殺すけれど、二人共にはできない。」といわれ「一人は私が引き受け申す」と答えたと伝わる(山川他1894:13)。

16 会津藩校日新館より江戸昌平饗に入り、経史を修め、8年間助教を務めた。その後、大坂で緒方洪庵について洋学を学び、武芸(弓・剣術・槍・馬術・柔術)も免許皆伝の腕前であった。高田藩の儒家や和算家も南摩を尋ねてきていた(星1990:110)。

17 現在の陸奥三郡(青森県三戸上北、下北の三郡と岩手県の一部)と北海道四郡(後志国瀬棚郡、同太櫓郡、同歌棄郡、胆振国山越郡)にあたる。藩名は、中国の詩文「北斗以南皆帝州」から

半島付近に移住することになった。会津開城から斗南藩への移住までのミワの動向に関する記録はないが、会津近郊で過ごしていたと思われる。

明治3年(1870)6月、桜井家は斗南藩領である青森県田名部郡斗南岡72番地屋敷へ移住した(私家版B)。斗南藩は3万石の領地はあったが、実質的には6000石ないしは7000石の収納にすぎず(豊田他監1966:233)、1万7千人の会津藩士は飢餓や凍傷などに苦しみ、例えば、前掲の『ある明治人の記録』には犬の肉を食べながら飢えをしのいだ様子や厳寒にひたすら耐える悲惨な生活が綴られている。

桜井家の記録にも「斗南に於ける生活は、並大抵のものではなく、殆んど飢餓線上にあったと云ふも、過言ではないのである。海浜に至り打ち上げられたる昆布を拾い集め、これを鍋に入れ、どろどろに煮て、その中に一握りの米を入れた粥状のものを啜りつつ、開墾に従事した。」(私家版B)とある。記録をしたミワの四男懋は斗南での生活を送っていないので、家族もしくは他の旧会津藩士よりの聞き取りであろう。ミワを含む桜井家は飢えに耐え凌ぎ、壮絶な生活を送ったと思われる。ちなみに、同年秋、斗南にて名義上存在していた白虎隊の解隊式を安渡(大湊港)で行っているが、その時政衛が隊長を務めた(本田1999:23)と伝えられる。

明治4年(1871)、廃藩置県となり、斗南藩も廃藩となった。多くの旧会津藩士は、斗南の地を離れ、故郷会津へ帰還したり、縁類や知人を頼って全国に散ったりした。山川家は東京へ移住することとなり¹⁸、ミワの長男保彦は、山川家の書生として上京した。また、正確な年は不明であるが、この頃、長女ヤスも山川家を頼り上京し、東京女子師範学校に通った(私家版B)。

桜井家は青森に残留し、明治6年(1873)年5月に青森県上北郡三本木村字並木34番地へ移住、同年7月7日には次女ヤエが誕生した。同年11月、政衛は青森県三本木小学校の教員となり、同時に明治9年(1876)に青森小学師範学校¹⁹に入学し、明治11年(1878)に卒業した(私家版B)。

学制が発布され、明治6年(1873)に開校した三本木小学校は、地域で一番早く設立さ

とり「例え本州の最北の地に流されても、同じく民であり、朝敵でもなければ賊軍でもない。ひとしく北斗七星を仰ぐ帝州の民である。」(猪苗代町編1982:297)という願いから名付けられたという。しかし、反面「いつかは南へ帰るといふ薩長藩閥政治に対する反骨心も含まれていた。」(葛西1971:112)との見解もされている。また「南斗六星」からとったのであって、「さそり座を薩長、射手座を会津に置き換え、会津藩を奈落の底に墜した新政府を子々孫々に至るまで未来永劫忘れることなく、きっと見返してやろうという悲憤をこめた。」(塩谷編1983:77)という見方もある。

18 いつからか定かではないが、明治中期の東京での浩郎は牛込区若松町(現新宿区)、二葉邸は小石川区久堅町(現文京区)、婚姻後(明治14年(1881))の健次郎邸は小石川区初音町(現文京区)、操邸は小石川区西江戸川町、のち小石川区同心町(現文京区)に在った。

19 明治9年(1876)8月に設立され、11月に始業した。明治11年(1878)1月に青森師範学校と改称した。

れた小学校であった。明治12年(1879)当時の「十和田市内小学校概要」の三本木小学校の項には、教員数は男性のみ5名、生徒数は男子102名、女子28名、首座教員に「桜井政衛」の名前があった(十和田市史編纂委員会編1976:602)。

首座教員とは、現在の学校長のことである。任用資格が必要で、有資格者が少なかった。師範学校を卒業した後、政衛は「青森縣教督として上北郡在勤、その後同十六年上北郡藤島伝法寺の小学校に勤務された」(私家版B)と桜井家には伝わっており、また「明治14年米田小学校首座桜井政衛は、藤島・伝法寺・大不動・滝沢・沢田・奥瀬の七校を兼務した。」(十和田市史編纂委員会編1976:616)との記録もあることから、政衛は首座教員を7校兼務していた時期もあった。

青森の小学校に勤務した約10年間にはさらに4人の子宝にも恵まれ、戸籍によると、明治8年(1875)12月19日に三女キヨ(別名^{たこと}田毎)、明治11年(1878)4月8日に次男弘(同年5月17日早世)、明治12年(1879)9月4日に三男^{ゆたか}胖、明治15年(1882)5月12日に四女マツエ(松江)が誕生している。

また、明治15年(1882)12月に提出された青森県令郷田兼徳への「就産資金拝借之儀嘆願書」²⁰をみると冒頭に「青森県管下居住旧斗南藩士族一千七十五戸総代平治右衛門政衛、謹^{ママ}テ奉煙願侯、…」(青森県史編さん近現代部会編2002:202、傍点引用者)とあった。嘆願書の記名をみると、政衛は五戸村の金沢平治右衛門と共に青森県三本木村に残留した旧斗南藩士の総代を務めていた。

その後、政衛は、明治16年(1883)9月に小学校を辞任し、函館縣檜山爾志郡書記として学務を担当することになり、函館に渡った²¹。長女ヤスは東京女子師範学校を修了したあと、江差の小学校に勤めていたので、函館で政衛と共に生活したが、ミワやその他の家族は、三本木に残っていたようである。明治19年(1886)1月、函館縣が廃止となり、政衛は三本木に帰ってきた²²。同年3月、再び三本木小学校に勤務したが、同年5月に退職、同5月25日、家督を長男保彦に譲った(私家版B)。保彦がいつ東京から青森に戻ってきたかは不明である。政衛43歳、保彦19歳であった。

3. 根室・屯田兵の生活

北海道の開拓と北辺警備を目的とした兵農兼務の屯田兵制度は、明治7年(1874)に屯田兵例則が定められ、翌年より札幌地域に東北出身の士族が入植したことに始まる²³。根

20 牧畜産馬、養蚕製糸、機織などの始業資金として69,875円を拝借し、5か年1期限とする3期限(15年)で返納したいという内容であった。嘆願は県令から国へ伝えられ、明治16年(1883)4月に農商務卿西郷従道の記名により聞き届けられた。

21 明治18年(1885)には、御用係となり勸農業課に勤務になった。

22 長女ヤスは江差に残り、明治28年(1895)11月7日、田中館寛次郎(岩手県盛岡市大沢河原小路出身)に嫁ぎ、明治34年(1901)まで函館に居住した(私家版B)。

23 拙著(遠藤2008)で屯田兵の概要、屯田兵制度の変遷についてまとめているので参照されたい。

室地域には、明治17年（1884）6月に設置が決まり、翌年10月より220戸の屯田兵屋が建設された（遠藤2008：145）。

明治19年（1886）5月、屯田兵第二大隊本部が設けられ、6月5日より青森・山形・新潟・福井・石川・鳥取の6県より募集された士族220戸、1083人が移住入地し、戸主皆兵をもって屯田兵第二大隊第一中隊が編成された。第二大隊長が和田正苗であり、その名をとり、和田村との呼称が決まった（渡辺編1968：408）。

桜井家は、屯田兵戸主を長男保彦として志願し²⁴、根室の屯田兵村（根室國根室郡和田村157番地、いわゆる東和田兵村²⁵）に移住した。青森から根室に移住したのは、政衛、ミワ、クニ（政衛妹）、長男保彦、三女キヨ、三男胖、四女マツエの7人で、祖父母は会津高田に帰還した。長女ヤスは函館に居住しており、次女ヤエはミワの妹操（三女）に世話になり上京していた（私家版B）。

同年6月5日、各地を廻り、東和田兵村へ入植する屯田兵たちを乗せた御用船「和歌の浦丸」が根室港に入港、船会社の倉庫で一泊し、翌日朝から根室市街地から東和田兵村まで4里、原始林の中のただ一筋の細い道のりを徒歩で向かった。16時には現地に着し、中隊幹部より屯田兵屋が割り当てられた（伊藤1980：158）。屯田兵には、家具・農具が支給され、3年間は食料（扶助米、塩菜料）の支給²⁶があるが、3年間で5000坪の開墾が義務付けられていた。屯田兵もその家族も起床や食事など、すべてラッパの合図で生活をし、戸主は毎日練兵場で訓練があったため、家族が開墾に従事した（渡辺編1968：409～410）。屯田兵村での生活について、桜井家には次のように伝わっている。

「屯田兵屋は、間口五間、奥行三間半の木造で、壁は中塗だけで外部は板張であった。内部は四畳半、六畳との二間は畳敷で、天井板は四畳半の室だけが張ってあった。その他、三坪の板張の室に炉が切ってあって、薪を燃やし、煮炊や暖を採るのに使った。炊事場は一坪五合、土間は七坪。この土間に、冬期の根菜類を貯蔵する穴蔵が作られており、農具置場もあった。銚架は六畳間に設えてあった。便所は七合五勺、裏出入口の外部の軒の下に作られ、冬期は雪除を作らないと吹雪の時などは便所に行かれなかった。この他、馬小屋があった。これは自費の建物であるが、いつ頃建てられたのか、いつ頃馬が飼はれていたか不明であ

24 屯田兵の募集年齢は、明治18年（1885）当時の屯田兵条例では17歳以上30歳以下と定められており、明治23年（1870）に17歳以上25歳以下と変更された。屯田兵は、屯田兵村への定住を前提としたので、若い年齢の戸主が求められた。

25 根室地域には、更に、明治21年（1888）に120戸、明治22年（1889）に100戸が第二大隊第二中隊として入植し、西和田兵村と呼称された。西和田兵村の出身県は石川・愛知・滋賀・鳥取・広島・福岡などであった。明治22年（1889）には東和田兵村と西和田兵村を合わせ、第四大隊として再編成された。

26 桜井家には「扶助米は15歳以上60歳未満には玄米七合五勺、60歳以上15歳未満には玄米五合、7歳未満には玄米三合」（私家版B）であったと伝わる。

る。農作業には使っていなかった。

屯田兵屋は道路に面して、四十間毎に整然と建てられ、兵農村としての面目を形づくって居た。桜井家の処は、通称六軒家と呼ばれ、その名の如く地勢の関係上、向三軒両隣の六軒よりなかったのも、その名が自然に生じた。

家屋敷の奥の方には、境界に小川があり、且つ谷地があつて菅坊主や水芭蕉などが群生しており、開墾には不適の地であつた。井戸は共同使用で、道路の向側にあつた。吹雪の時や暴風雨の時は水を汲むことは、なかなか難儀であつた。また厳冬の折は、井戸水が凍つて汲むことが出来ないのも、雪をとかして使用したことも珍しくなかつた。

さて、五千坪の開墾の終つた者には、追給地として更に五千坪の土地が給与された。その選択は五千坪開墾の順位によって定められた。その後、別当賀という所に更に五千坪の土地が支給されたが、熊笹が生い茂る土地であつた。合計壱方五千坪の土地は、太平洋戦争の後の農地法によって不在地主の故を以て、全部他人の有に帰してしまつた。

和田村に移住してより、三年間軍紀の下の生活は、兵士として勤務する戸主はともかく、家族は何れも士族伝統の生活に慣れているので、生まれてから一度も鋤や鎌等を握つたことのない人々が多かつたので、巨木を伐り倒し、茨を刈り唐鋏を以て荒地を開墾する等の急激な生活環境の変化は甚だしき過労と苦痛をもたらした。

桜井家もその例に漏れず、男手は兄上（注：保彦のこと）が練兵（毎日午前中）に出ている間は、父上一人であつた女手のみなるため、開墾はとかく意の如く進捗しなかつたと聞き及んで居た。

屯田兵としての移住者は士族といふことになつて居たが、中には士族の株を買つて士族となり移住した者もあり、それ等の人々の開墾の実績は大いに挙がつて居た。以上のごとき状況で、三年間の扶助のあつた間は、どうにかその生活が細々ながらも続けられたが、扶助の廃止と共に生活難はひしひしと迫つて来たのである。

而してこの和田村は、開墾当初は大麻、黍、そば、大豆類を始め、馬鈴薯、大根等の農作物は相当に収穫があつたが、これ等の作物は、年と共にその収穫が不良となり、しかも主食たる米そばを生産しない、この豊穡でない土地の農作物では、一家の生活を維持し兼ねる有様なので、兵役関係の終了と共に、この土地を見限り他に転出するもの、或は他に職を求めるもの、漸く多きを加えるに至つたのである。吾が家でも兄上は、後年根室郵便局に就職され、そしてどうにか糊口を過す程度であつたが、生活そのものは貧困の一語で尽くされたのである。」

(私家版B、句読点傍点注引用者)

ミワは一律の屯田兵屋に住み、屯田兵の家族として上記のような辛い開墾生活²⁷に耐えた。根室に移住してから、ミワの家族には大きな変化があった。明治20年（1887）10月16日に四男懋、明治21年（1888）12月10日に五男潔（明治29年（1896）改名幹久）が誕生した（戸籍謄本）。これについて、懋は続けての男子誕生を「母上の御苦勞はさこそと察するに余りありといふべきである。」（私家版B）と回想している²⁸。

また、三男胖は山川家の書生として上京し²⁹、四女マツエもまたミワの妹操（三女）の世話になりながら小学校へ通うこととなった（私家版B）。すでに上京していた次女ヤエは、明治24年（1891）8月25日に操の養女となった³⁰。同年8月31日には、三女キヨが鈴木左近（北海道標津郡伊茶仁村字川向）へ嫁いでいる³¹（戸籍謄本）。

明治27年（1894）7月には日清戦争が勃発している³²。同年8月20日、三男胖が福島県白河町桜山にある浩（長男）の別荘（逸遊亭）にて病死する（戸籍謄本）³³。16歳の子どもを亡くした悲しみのミワは妊娠中で、同年10月17日、五女ユキエ（雪枝）が誕生した（戸籍謄本）。47歳になっていたミワにとって、10人目の出産であった。

ところで、明治22年（1889）3月に二葉（長女）の夫で会津藩家老であった梶原平馬が根室で亡くなっている。拙著（遠藤2010）に詳しいが、斗南藩移住後に二葉と離縁した平馬は、明治11年（1878）より水野貞と過すようになり、明治14年（1881）頃、根

27 他の入植者について「兵士として勤務する戸主はともかく、家族はこれまで何れも士族伝統の生活に慣れ、生まれてから一度も鋤や鎌を手にしたこともなく、それが巨木を刈り倒し茨を狩り、唐鋤で一畝一畝荒地を開拓するという、急激な生活の変化と甚だしい過労と苦痛を与えたもので、なかにはそのために気が狂った者さえあった」（渡辺編1968：410）という逸話が残る。

28 懋は、明治23年（1890）6月28日に松川清三郎（根室弥生町一丁目11番地）の養子となったが、翌年8月25日に養子離縁され、復籍している。理由は分かっていない。

29 三男胖は、根室の小学校に通ったともいわれており、山川家にいつから世話になったかは記録にないが、上京したのは確かである。

30 鶴沢氏によると、次女ヤエは、のち軍医鶴田禎次郎（生没年1865~1934年）に嫁ぎ、四姉妹（静子、磯子、梅子、君子）を儲けた。鶴田は、日露戦争で第一師団軍医部長として乃木希典に仕え、旅順攻略に従事した（『日露戦没従軍日誌』を著す）。大正5年（1916）には陸軍軍医総監（中将相当官、陸軍省医務局長）に任官した。また、長女静子は軍医の篠塚氏に嫁ぎ（長男義虎も軍医少佐、沖縄で戦死）、次女磯子は軍医の井深健次（会津出身で明治学院の2代目総理となった井深梶之助の次男、ハンセン病患者と共に生きた神山復生病院の看護師井深八重は従妹）に嫁いだ。井深は陸軍軍医総監（昭和17年（1942）に陸軍軍医学校長となる）に任官した。尚、二葉（長女）の長男景清は海軍軍医であり、日露戦争で大連防備隊軍医長を務めている。

31 三女キヨは、明治25年（1892）4月12日に長女サヨを産むが、明治32年（1899）6月27日に早勢善作（根室緑町6丁目15番地）へ養子縁組した。

32 明治28年（1895）3月4日、長男保彦が日清戦争に応召されるが、すぐ講和となり、同年5月31日に凱旋した。

33 三男胖は、白河戦争での会津藩戦没者の墓碑がある常宣寺に葬られた。「逸遊亭」は現在の地名で白河市金勝寺の桜山にあった松平定信の別荘跡に明治23年（1890）、浩（長男）が別荘をつくったもので、浩は時折ここで余暇を過ごしていた。

室に移住した。貞の経歴を記すと、函館での女紅場にょこうばの教員を経て、明治14年頃から明治20年(1887)まで根室の花咲小学校に勤務した。平馬が亡くなった後、明治23年(1890)6月から私立の根室女子小学校を開校させ校長となり、明治32年(1899)の閉校まで教鞭を執った。閉校後、貞は再び花咲小学校に勤め、花咲小学校が男子校となったのに伴い、明治35年(1902)に根室女子尋常高等小学校へ転勤し、明治43年(1910)まで勤めた(梶川編1904:58)。

これまでの「梶原平馬は消息不明」という通説は間違いで、二葉は平馬の消息は知っていたと拙著(遠藤2010)で確認したが、追記として、二葉の曾孫にあたる杉浦恭子氏³⁴は、祖母清子氏より「家老であった平馬は楽な生活をしないために、さらに苦勞をする戒めのために北海道へ赴いたそうで、二葉とは梶原家を残すために離縁した。その通りに一人息子を「梶原」景清として二葉は育て、その二葉は長く根室の貞に送金していた。また、貞に梶原の姓を名乗らせなかった」と聞いているという。

義理の兄であった平馬と内縁の妻貞が根室で生活している境遇のなか、ミワ一家も根室で過ごしていた。明治42年(1909)頃であるが、四男懋が根室の北斗小学校での教員をしている時分、教員対象の講習で水野貞と懋が同じ講習を受けている記録(川上他1993:52)がある。屯田兵村が設置されてから、明治22年(1889)当時の根室の人口は2179戸(8016人、内男4535人、女3481人)であった。根室に移住した会津出身者は少なからず存在するが、そのような根室の地³⁵で、ミワは時折、奇縁を感じながら生活をしていたと推察できる。しかし、桜井家がなぜ「根室」の屯田兵に志願したのか、平馬が亡くなるまで政衛やミワとの根室での接触があったのかを示す資料はなかった。

4. 明治後半期の生活

明治29年(1896)年5月、屯田兵制度が廃止となった。同年9月19日、操(三女)の世話になっていた四女マツエが根室に戻り、同じ和田村の屯田兵の角田両角(新潟県出身)に嫁いだ(戸籍謄本)。明治20年代後半に五男幹久は、和田村の小学校を卒業後に上京し、操の世話になることになり、東京農学校(現東京農業大学)林学実科に入学している(私家版B)。

34 昭和3年(1928)生まれ。平成25年(2013)8月16日、目白にて聞き取り。二葉の一人息子景清には長男景浩と長女清子がおり、清子は石川栄耀ひであき(山形県出身、東京帝国大学出身の都市計画家、新宿歌舞伎町の名付け親)と結婚し二男四女(允、中、恭子、倫子、圭子、玲子)を儲けた。

35 昭和18年(1885)から2年間、ミワの妹捨松(五女)の次男大山柏かしわは第33警備大隊長として根室で沿岸警備にあたった。その時、日誌『北のまもり—大隊長陣中日誌—』(鳳書房)を著しているが、伯父である梶原平馬、伯母であるミワ一家のことについては一切書かれていない(根室市広報より)。根室で嫁いだ自身の従姉たちがまだ居たであろうが(平成29年(2017)現在、根室には四女マツエの子孫が今も居住しているという、松永伊知子氏より聞き取り)、交流があったのかは不明である。

明治30年（1897）8月11日には、長男保彦が同じ和田村の屯田兵の娘シケエ³⁶（山形県出身）と結婚するが、翌年2月離婚となった。明治32年（1899）5月に三女キヨもまた鈴木左近と離婚した。同年8月10日、長男保彦は、同じ和田村の屯田兵の娘シゲノ³⁷（秋田県出身）と再婚³⁸（戸籍謄本）、この頃、保彦は根室郵便局に勤務していた（私家版B）。

明治34年（1901）3月、四男懋は和田小学校を卒業し、根室唯一の中学校・私立根室実修学校に家庭の事情で入学できなかったため、一年間代用教員を務め、翌年3月札幌の北海道師範学校予備科（1年間）に入学、のち本科（4年間）に入学し、5年を寄宿舎で過ごした³⁹。懋の札幌滞在中、ミワは操が病気となったので、看病のため上京したことがあったという（私家版B）。その時の詳細は不明であるが、東京にて兄弟姉妹と一時過ごしたことは確かである。

ちなみに、浩、二葉、ミワ、健次郎、操、常盤、捨松の全員が写っている写真がある。明治29年（1896）6月28日に撮影されたもので、それぞれの子どもを交えての再会にミワも心躍ったに違いない。浩は明治31年（1898）に亡くなっているため、最後の兄弟姉妹の集合であったかもしれない。（写真2）



写真2 山川兄弟姉妹の集合写真

（明治29年6月28日撮影）（桜井懋『山川浩』私家版、1967年より転用）

2列目着席者一番左より常盤、操（鶴田静子（ミワ次女、操養女ヤエの子）を抱く）、ミワ（五女ユキエを抱く）、二葉、山川仲（浩後妻）、山川卿（健次郎妻）、捨松、3列目一番左が鶴田ヤエ（ミワ次女、操養女）、後列左より健次郎、浩

-
- 36 明治15年（1882）7月13日生。山形県出身の屯田兵・小松重春の次女（戸籍謄本）。
- 37 明治16年（1883）8月1日生。秋田県出身の屯田兵・佐々木辰次郎の長女（戸籍謄本）。
- 38 長男保彦には、明治34年（1901）8月12日長女カホル、明治37年（1904）1月7日次女春江、明治40年（1907）1月1日長男政恵、明治43年（1910）6月23日次男篤が誕生した（戸籍謄本）。
- 39 8月の夏休み中は根室に帰省するお金がないため、函館から岩見沢、のち旭川に移住していた長女ヤス宅に世話になっていたようである。当時は、札幌から函館まで鉄道、函館から汽船で根室という行程であった（私家版B）。

明治35年(1902)5月1日には、三女キヨが嫡出ではないイキ(別名咲子)を出産するという出来事があった。同年5月6日には、標津郡伊茶仁村の鈴木鑓之助が認知するが、その後、イキは明治39年(1908)1月に政衛の養女となった⁴⁰(戸籍謄本)。

明治37年(1904)、日露戦争が勃発すると、後備役であった長男保彦が補充兵として応召され、第七師団歩兵第27聯隊に入隊し出征、奉天会戦に参加した(私家版B)。この頃の政衛について「明治30年代の後半、政衛も植別(羅白)、厚別、別当賀(根室)で教員をしている。厚別では妻のミワも裁縫を教えたらしい」(川上他1993:52)と伝えられている。

政衛は、明治36、37年(1903、1904)に厚別簡易教育所、明治38年(1907)に穂香簡易教育所を経て、明治39年(1908)10月1日より別当賀特別教育所(後の別当賀小学校⁴¹)に赴任し、初代校長に就任した。根室市街地から別当賀までの道は「僅かに人と駄馬を通ずるのみで、道の両側は草と小枝で被われ、その下をくぐり抜けるという熊の出る山道」(別当賀の歩み編1976:64)といわれていた。校舎は集落で建てた山の神社を改造して、教員住宅と教室(11坪半)に仕切った単級学校で、「桜井政衛先生(漢文の先生)を迎えて初代の先生としました。勿論、寺子屋の延長みたいなもので、一斉指導ということはなく、もっぱら一人一人を先生の膝下によび一字一字を指して教える個別指導でした。筆一本算盤一つで教科書さえ備わず先生が力に応じて手本を書きあてて学習した。それでも子どもは親しみよく学びました。」(別当賀の歩み編1976:64)と伝えられている。

また、根室出身の文化財研究者(考古学や植物研究)で同僚かつ校長の後任となった伊藤初太郎⁴²は、「当時老師慰安の酒は地元にはないので休みの日には遠くの三里の山路を

40 三女キヨはイキを伴い、一時小石川同心町の操の元に世話になっていたが、根室に戻り、看護婦として勤務、産婆学を学び、産婆の試験に合格した。旭川に住んでいた長女ヤスにイキを託しながら、旭川で産婆の実習に励んだ。のち、札幌の豊平にて産婆院を開業する。キヨの波乱の生涯を慙は「田毎姉上様、数奇の運命に弄ばされた方は、吾が兄弟姉妹では他にあるまい、而しながら晩年は安らかに終られたことは何よりであった。尚ほ余談だが吾が一家で、鋤を踏めるのはこの姉上一人であった」(私家版B)と回想している(田毎はキヨの別名)。

41 正式には、「幌茂尻尋常小学校附属」の別当賀特別教育所であり、四年制学級として創立した。生徒数は最初7名であった。創立90周年を迎えた平成10年(1998)に厚床小学校と統合され、現在は閉校となっている。

42 生没年は1883～1976年。明治22年(1889)に愛知県より西和田兵村に家族で入植した。花咲尋常高等小学校高等科、北海道師範学校を卒業し、明治34年(1901)に弥生小学校に勤め、明治36年(1903)より幌茂尻小学校の校長となった。以後、根室市内の小中学校校長を歴任し、別当賀小学校では2代、7代の校長を務めた。伊藤は根室市内の遺跡調査、特にチャシの研究を丹念にした。また、花咲港の車石の研究紹介、天然記念物である落石のサイイツツジを発見したことで知られる(猪熊編2009、根室千島歴史人名辞典編集委員会編2002:32)。職員録をみると、「校長の在任期間」は、政衛は明治39年10月1日～明治40年6月1日、伊藤は明治39年11月10日～明治43年4月29日(別当賀の歩み編1976:94)とあり期間が重なっていた。伊藤は「本校・幌茂尻小学校」との記載があるので、任務を兼務していたためか。尚、政衛の職員とし

温根沼^{おんねとう}まで買いにきたものでした。貧乏徳利を背負った異様な姿をしているので大砲先生という異名をつけられていた。当時の教授法は寺子屋式で同学年でも年齢の相違があり男女、大小混ぜて十人足らずの単級教室だったが、桜井先生の情熱には頭が下がった。」(『根室新聞』⁴³)と回想している。休みの日は温根沼まで行ったということは、政衛は別当賀で生活していたことが分かる。別当賀から東和田兵村や根室市街地は20キロ近くあり、ミワも同居していたのか記録はない。

余談であるが、別当賀小学校の開校70周年記念誌を作成するために、昭和51年(1976)6月2日に「別当賀の今昔を語る」という座談会が開かれた。そこには「最初の先生は桜井先生という先生で、その人は乃木大将の奥さんの弟だと言われています。先日亡くなった伊藤初太郎さんが話してくれました。」(別当賀のあゆみ編1976:81)とあった。乃木希典の妻静子は鹿兒島出身の湯地家に生まれた末子であり別人である。なぜそのような噂が広がっていたのか、政衛に威厳があったためだろうか、と思わせる逸話であった。

明治40年(1907)3月、四男懋が北海道師範学校の本科4年を卒業し、和田小学校勤務と決まり、根室に戻ってきた。懋が戻ると「両親の喜び、特に母上の御満悦は一通りではなかった」(私家版B)という。保彦一家と同居したが、同年8月頃、手狭になったので、和田小学校前の空き兵屋を借り、懋、政衛、ミワで移転した(私家版B)。

移転してすぐの11月、懋は左肺炎カタルのため、療養退職となる。翌年5月には復帰でき、目梨郡薫別(知床半島東側の付け根)の単級小学校へ赴任となった。この時、政衛、ミワ、イキと四人で校舎の一隅に移転した。政衛もまた隣村(北側)の植別村簡易教育所に勤務するようになり、週末だけ薫別に戻るという生活をしていた。その後、懋は明治42年(1909)11月に根室町の北斗小学校赴任が決まると、一家は根室町に引っ越し、また根室で数年の生活が営まれた(私家版B)。

5. 晩年のミワ

明治45年(1912)7月、懋は函館への転勤が決まったが、政衛が胃癌で重態となり延期された。同年(大正元年)8月3日に政衛は死去する。同年9月、懋は函館の住吉小学校へ赴任することとなり、ミワ、クニ⁴⁴が函館へ同行した(私家版B)。

での「勤務期間」は明治40年6月22日までとあった。

43 昭和27年(1952)10月21日付で、別当賀小学校50周年の時に伊藤が述べた記事。『根室新聞』のバックナンバーは、戦後の混乱のため入手困難になっており、国立国会図書館には該当日の新聞は未所蔵であり、北海道立図書館では所蔵が在ったはずだが実物は行方不明であった。根室市立図書館にも所蔵が在ったはずだが行方不明で、松永伊知子氏には資料捜索に大変手を尽くして頂いた。本論文では前掲の川上論文から一部引用(川上他1993:52)した。川上論文に別当賀小学校「50周年」とあったが、開校年から新聞掲載年が50年経っていない。新聞の所在を調査中である。

44 一緒に渡道し、これまで保彦一家と暮らしていたと思われる政衛の妹。クニはその後、保彦が病気になったため、看病のために根室へ帰った。保彦が死去すると、札幌の三女キヨのもとで

一年後、懋は函館の気風が合わなかったようで、大正2年(1913)8月に上京を決めた。懋は(住吉小学校の教育方針について悩み)「どうしても吾が良心がこれを許さず、またその任にあらざるを痛感する一方前途を考慮した結果、ここにこの際方向の転換を企図した」、「母上や田中館姉上⁴⁵とも相談し、茲に決意を固めた」(私家版B)と記している。

結果、ミワは秋田県の営林署(現林野庁東北森林管理局秋田森林管理署)に勤務していた五男幹久と同居することになり、秋田へ移ることになった。上京にあたり、ミワは懋と長女ヤスと共に政衛の遺骨を抱き、墳墓の地である会津へ出かけ、桜井家の代々の墓所がある高巖寺に埋葬している(私家版B)。久しぶりにミワは会津の地を踏んだと思われる。

同年12月より懋は東京の泰明小学校^{たいめい}に勤務しながら、同時に東京物理学校(現東京理科大学)に入学した。翌年4月には東京・鉄砲洲小学校に転勤となった。この頃、長男保彦が重態となり、家計援助のため、ミワは懋に廃学して帰郷するように説得をしている。悩んだ懋は、叔父健次郎や叔母操に相談し、結果、山川家の世話になることで、懋の生活費を根室に送金し、在京を続けることに決まった(私家版B)。

大正4年(1915)5月1日、長男保彦が死去する(戸籍謄本)。嫁シゲノは実家の佐々木家に復籍することになり、保彦の長男正恵(7歳)、次女春江(11歳)は秋田の五男幹久の許に引き取られた(私家版B)。ミワは、まだ幼い孫と同居し、世話することになった⁴⁶。

この頃、ミワの周辺では更に不幸が続いた。大正5年(1916)3月3日、ミワの妹操(三女)が死去、大正6年(1917)12月20日五女ユキエがミワの妹常盤(四女)の世話で健次郎の教え子であった猪狩満和^{いがりみつかず}に嫁ぐが、翌年6月2日に病死してしまった(戸籍謄本)。

一方、懋は、大正5年(1916)秋に健次郎の世話で明治紡績合資会社に就職が決まり、福岡へ赴任し、大正7年(1918)7月23日に健次郎が仲介となり、飯沼檀^{まゆみ}(会津出身)と結婚した⁴⁷。大正9年(1920)3月27日から4月7日まで、懋は青森県在住のミワのもとに挨拶に赴いている(私家版B)。この記録によりミワは秋田から青森に転居していたことが伺えるが、その時期についての資料は残っていない。

ところで、大正8年(1919)夏、青森に居住するミワを弟健次郎が訪ねた記録が残る。

過ごした(私家版B)。

45 ミワの長女ヤスのこと。

46 その後、正恵は少年時代を秋田で過ごし、福島高等商業学校に入学した。

47 ミワの母・艶の妹ふみは、会津藩士飯沼一正に嫁いだ。ふみと一正の次男閔弥の娘が檀である(懋と檀ははとこ同士)。ちなみに、閔弥の兄は白虎隊として戊辰戦争に参戦、自刃した少年兵で唯一生き残った飯沼貞吉である。檀は大正7年(1918)10月から昭和15年(1940)まで行橋の京都女学校に勤務した。その間、大正9年(1920)8月7日に長女京子、大正11年(1922)3月2日次女和子が誕生した。また、懋一家は、健次郎の二男憲の妻鈴音が産後すぐ死去したため、その長男健浩を引き取って育てた(私家版B)。飯沼家と山川家のつながりや健浩についての逸話は他稿に詳しく記す予定である。

当時、東京帝国大学総長であった健次郎⁴⁸の日記⁴⁹によるものである。それによると、健次郎は、7月28日より北海道方面へ向かい、翌29日の朝7時に青森に到着した。この時、ミワと同居している五男幹久が出迎えた⁵⁰。その後、12時に函館に向かった。7月30日朝7時半に札幌に着くと、停車場にミワの三女キヨとイキ（キヨの子、ミワ養女）が出迎えた。二人は、翌日も健次郎の宿を訪れ、桜桃を差し入れしている⁵¹。その後、健次郎は北上し、滝川、富良野、旭川の各学校を視察、8月6日に札幌に戻ると、またキヨが出迎えた。すべての視察が終わり帰路となるが、東京に帰る前、健次郎はミワが住む青森の狩場沢に寄った。日記は以下の通りである。

「八月九日 午前四時過ぎに青森に着。食堂に入りたる手間取る由につき食事せずして乗車す。六時半発、七時十分余にて狩場沢に至る。高橋（注・同行者）は尻内に至り待ち合わす事とし予のみ下車す。潔並びに政憲及び姉上迎に出で居らる。潔の宅は直くそこなるにより、之に至り朝食の馳走を受く、金拾円を土産として姉上に呈す。十時十九分の汽車にて狩場沢を發し十二時五分かに尻内に至る。怪しげなる宿屋にて昼食を為す、潔は尻内迄送り呉れたり。……」

（尚友倶楽部編2014：145、注引用者）

狩場沢駅には、五男幹久、長男保彦の長男政憲と共にミワも迎えに出た。ミワにその時の様子を聞く術はないが、弟健次郎と会い、短い時間ではあるが、食事を共にできたことは、喜びであったに違いない。

大正8年（1919）12月23日には、イキが猪狩満和の後妻となった。イキの三女岡本静子氏⁵²に話を伺うと、会津出身の猪狩氏は健次郎と師弟関係にあり、東京電気（東芝の前

48 健次郎は、明治34年（1901）に東京帝国大学総長に就任するが、戸水事件（東京帝国大学教授戸水寛人が日露講和条約の締結反対を主張）により、明治38年（1905）に引責辞任。明治専門学校（九州工業大学の前身）総裁、九州帝国大学総長（明治44年（1911））、京都帝国大学総長（大正2年（1913））を経て、大正2年（1913）に東京帝国大学総長に再任されており、大正9年（1920）まで勤めた（大竹他編2013：203）。

49 秋田県公文書館が所蔵している。これまで健次郎の日記、手帳の存在は知られていたが、原本は所在不明であった。平成24年（2012）に中澤俊輔氏（秋田大学）により日記の一部である写本4冊が発見され、『山川健次郎日記』（芙蓉書房出版、2014年）として小宮京氏（青山学院大学）と共に翻刻された。本論文では翻刻を参考にした。

50 「青森には潔出迎居り万事世話し呉れたり」とある。潔は幹久のこと。

51 「停車場に田毎、さき、迎に参り居たり。」とある。田毎はキヨのこと、さきはイキのこと。イキはこの頃、実母キヨのもとで過ごしていたのであろう。翌日の日記は「田毎、さき来宿し桜桃の土産あり」である。

52 大正13年（1924）生まれ。平成29年（2017）9月11日、練馬にて聞き取り。満和とイキは五男四女（淑子、雅子、静子、満昭、満友、満信、紀久子、満敏、満教）を儲けた。女中（使用人）が2人ほどいたとはいえ、満和は末子の満教が4歳の時に亡くなったため、イキの9人の子育ては大変であった。イキは昭和55年（1980）に亡くなった。



写真3 晩年のミワ

①家族集合写真

(大正9年(1920)11月頃) 鶴沢佳子氏所蔵
 前列左よりイキ(イキ次女雅子を抱く)、淑子(イキ長女)、フキ(幹久妻、長女秀子を抱く)、ミワ、ヤス、キヨ、後列左より幹久、懋、政恵(保彦長男)、春江(保彦次女)

②ミワの肖像

(大正15年11月、80歳)
 鶴沢佳子氏所蔵

③大塚山公園内にある
 高巖寺桜井家の墓所
 (昭和40年代に区画整理され、現在地に改葬)平成29年(2017)7月6日筆者撮影

身)に勤めたあと、諸所の大学で物理学の講師をしていた⁵³という。イキは物静かな女性で、娘である岡本氏は怒られた記憶がない。イキ自身の父である鈴木家とも繋がりはずっとあったらしいが、戸籍では兄(血縁では伯父)にあたる懋をかなり頼っていたという。岡本氏からは、ミワやキヨについての逸話をもっと聞いておけば良かったと今になって思うと伺った⁵⁴。

大正9年(1920)11月9日には、五男幹久がフキ⁵⁵と結婚した(戸籍謄本)。ミワは、引き続き幹久家族と生活をしたので、晩年も孫に囲まれたにぎやかな生活を送った。幹久の次女桜井圭子氏によると、ミワに生姜を薄く切って砂糖で煮たものを食べるかと勧められた思い出があるという。圭子氏より鶴沢氏に伝えられた話によると、「年は定かではないが、ミワは福岡の懋のもとへ赴いたことがあった。幹久の妻のフキが上野まで送り、そこから迎えが来て、九州へ向かった。当時、懋も妻の檀も仕事が忙しかったそうで、孫の京子、和子、預かっている健浩(健次郎孫)、ねえやとばあや⁵⁶がいたそうだが、馴染めなかったのか、ゆっくりできなかったのか、すぐにミワは帰ってしまった。」という。古希

53 猪狩家には、ロンドンから洋書が定期的に送られてきており、家が傾くほど蔵書があった。満和はいつも洋書を読み、勉学に熱心であった。昭和20年(1945)3月に60歳で亡くなった時は、戦中で家族は混乱した。懋は蔵書を手伝いをしたという(岡本氏よりの聞き取り)。

54 岡本氏は父の前妻であるユキエ(ミワ五女)について、誰も覚えている人がいないのを嘆き、没後100年の供養をしたという。大正6年(1917)の猪狩満和とユキエの東京での結婚式の写真を保存しており、ミワも式に同席したのが確認できた。

55 明治30年(1897)3月7日生(父布目五郎平、母チヨ)で、大正9年(1920)12月3日に入籍した。次男国雄氏は伯父となる懋の「桜井家の記録」を翻刻した。

56 鶴沢氏によると、懋の家の女中(使用人)と思われるが、名前は定かではない。

を過ぎて九州まで一念発起で赴くとは、どうしても懋に会いたかったのだろう、と鶴沢氏は思いを巡らせていた。

昭和7年(1932)5月26日、ミワは死去する。前年6月26日には、弟健次郎も死去していた。病気の報を聞いた懋は、福岡より見舞いにいったが、臨終には立ち会えなかった。懋は「母上には、御生前、一方ならぬ御苦勞をかけたことを思うと、断腸の思いにたえないのである。しかし、晩年弟幹久夫妻の孝養により、この世を終われたことはせめてものである。どうか安らかにと、この御冥福をお祈りする次第である。」(私家版B)と回想している。(写真3)

6. おわりに—結びに代えて—

戊辰戦争の敗戦後、斗南、根室、秋田、青森で厳しい環境を逞しく生き抜いたミワの墓所は、夫政衛と同じく会津の高厳寺にあり、故郷で静かに眠っている。ミワは、五男五女を産み、斗南や根室といった辺境の地にしながら子女に教育を受けさせる努力をし、三女キヨ、五女ユキエ(次男弘は早世)以外の子女7人を、東京の山川家邸(浩、健次郎、操)の書生、居候として過ごさせていた。また小学校だけではなく、師範学校をはじめとする高等の学校に通わせた子女もいた。

根室での生活が一番長かったが、同じ屯田兵村内で婚姻を結んだ一家が数家あった事実から、近隣との関係も良好で過ごしていたことが推察される。屯田兵制度が廃止されると、根室近郊であるが、夫政衛や四男懋の転勤に伴い、空き屯田兵屋や小学校の校舎の一隅など、何度か転居した。自身は、裁縫を教えたりした時期もあったが、所属する仕事をすることなく、夫や子女の人生に寄り添い支えていた。

東京で撮られた写真が数点存在することから、明治中期のミワは根室に籠っていたのではなく、上京する機会が少なからずあったこと、夫政衛の納骨のために会津にも帰郷していたことも明らかになった。また、上京した子女や孫の婚姻、嫁ぎ先は会津出身者が多かったことも特筆したい。そして、山川家の兄弟姉妹とは、晩年に至るまで連絡を密にしており、お互いの子女・孫の嫁ぎ先や就職先に至るまで面倒をみて、支え合いながら⁵⁷、明治大正期を生きたのである。また、7人兄弟姉妹の没年をみると(常盤は不明であるが)、浩(明治31年(1898)、53才)、二葉(明治42年(1909)、65才)、操(大正5年(1916)、64才)、捨松(大正8年(1919)、59才)、健次郎(昭和6年(1931)、77才)、ミ

57 前掲した『山川健次郎日記』にも健次郎邸に出入りする親戚や婚姻による親戚との交流の様子が細かく記されている。また、岡本氏の話によると、自身の幼少時代(昭和初期)は操の養女となった次女ヤエの家(千駄ヶ谷、鶴田家)によく遊びに行ったことを覚えているという。山川家同様、どこか話し方も上品で憧れの家であったとの話であった。また、桜井圭子氏の話では、鶴田家には、操の宮中の人形が飾っており、羨ましかったという(鶴田家は4姉妹であり、それぞれが嫁いだ後、次女井深磯子の三男健明が鶴田家の養子となった)。時代や世代が変わっても、山川家に関わる子や孫、曾孫たちの繋がりは続いていた。

ワ(昭和7年(1932)、85才)であり、ミワは兄弟姉妹のなかで長寿であった。

ミワの人物像はどのようであったのだろうか。夫は漢学塾の塾長や首座教員(学校長)など教育に携わる仕事を続け、長女ヤスや四男懋も小学校教師を勤めた。かつて、会津藩では藩士の子弟の義務的な就学制度として、10歳以上の男子はすべて藩校日新館⁵⁸で教育を受けたが、藩校への就学前(6~9歳)の子弟が学ぶのが「じゅう什の掟⁵⁹」であった。什とは10人前後の集団を指す。午前中は寺小屋で過ごし、午後には集まって什で過ごす。各集団を「遊びの什」とも呼び、年長者が什長となった。什が集まる家は交替制であった(豊田編1966:312~315)。会津藩では家庭教育が重視され、「家庭にあって主として子女の教育に当たったは、素読・習字をみてやる傍ら、純愛にともづいて将来の心得となるべきことを何くれと教誡」(豊田編1966:316)し、切腹の稽古や質素儉約、厳しい躰を行い、子弟が藩校に入学する以前から「一種謹厳の風が養なわれるとともに、勇武の風尚を養成」(豊田編1966:317)していたといわれる。

会津藩では藩祖保科正之が家臣に公布した「家訓十五ヶ条」(寛文8年(1668))が代々藩主に受け継がれて⁶⁰おり、正之の存在は幕末に至るまで影響力があった。正之は「女性は齊家のために、夫や家族に奉仕すべきもの」「女性は家を守るために貞節であることがあるべき姿」(竹川1998:38)という女性観をもっていた。

会津藩で実践されていた女子教育の成果について、二葉(長女)の例を挙げてみよう。二葉は、東京女子師範学校に明治10年(1877)から明治37年(1904)まで勤めた。当時は良妻賢母主義教育⁶¹が日本の女子教育を支配していた。これに反抗し、明治末期から社

58 享和3年(1803)、会津藩5代藩主松平容頌かたのぶの治世に創設された。教科書は、孝経、大学、論語、孟子、中庸、小学、詩経、書経など儒教を中心とした総合的教育であり、会津藩祖保科正之の思想に拠る学制であった。12歳になると書学寮、武学寮で書道や武技も学んだ(豊田編1966:256~274)。

59 「什の掟」とは7ヶ条あり、年長者の言うことに背くな、嘘言は言うな、卑怯な振舞はするな、弱い者はいじめめるな等、各条がすべて「なりませぬ」との禁止で終わり、最後に「ならぬことはならぬものです」と念押しする。朱子学的倫理として色濃い「悌」(年長者に従順に仕え、兄弟・幼長に情が厚いこと)の教えであり、毎日の「お話」というかたちで実践・体得させていた。「什の掟」がいつできたか定かではないが、享和3年(1803)に発行された『日新館童子訓』(儒教の經典や心得が書かれ、日常の作法の手本となった。低学年用の修身教科書)が生まれる基になっていたのも、それ以前であることは確かである(畑2004:20)。

60 毎年、正月11日、8月1日、12月18日の3度、城中で家臣一同が拝聴するならわしがあった。第一条には「大君之義、一心大切ニ可存。忠勤付加以列国之例自処焉。若懐二心則非我子孫面々、決而不可從旨。」とあり、会津藩は他の藩よりも徳川家への恩義を忘れてはならない、二心を抱くことなく忠誠を尽くすことという内容であった。正之の異母兄3代将軍家光との託孤奇命による藩祖の遺訓として、幕末に至るまで藩の醇正な精神として忠誠の心得となっていた。

61 良妻賢母主義教育を説明するには簡単にはいかないが、良妻賢母論を簡潔にいうと前期は家庭主義的良妻賢母論と後期(明治30年代以降)は国家主義的良妻賢母論にわかれる(布川2000:123~130)。二葉はどちらの時期も女子教育に関わっている。拙著(遠藤2014)では会津出身の瓜生イワを例に挙げ、「家族国家」観と良妻賢母像の関係について考察しているので、参照されたい。

会的にも家庭的にも新しい地位を獲得しようとするいわゆる「新しい女」が出現するが、二葉はこれとは思想を別にしてしている。女高師の「規則づくめの学校生活」（芳賀1990：9）に「異和感」を感じた大江スミ⁶²は「とくに舎監の山川二葉への反発はきびしく二度と会いたくないと考えている。」（芳賀1990：9）と名指しするほど、二葉は徹底して「男女同権は正論ではなく女子は従うべき方針があるという教え」（黒川編1904：4）を支持していた⁶³。

結婚前、会津藩での教育を二葉と共にミワも受けていた。良妻賢母主義教育と近世の会津藩の女子教育の志操はよく似ている。会津藩の学風が、例にもれずミワにも受け継がれたとすると、ミワは夫や家族に尽くし家を守ることに従順であり、子女には（例えば懋は厳格な性格であったと鶴沢氏から伺ったように）厳しい躰を行い、不備なく教育を受けさせた。会津藩での女子教育は人間的生き方が制約された面もある（竹川1998：38）かもしれないが、それだからこそ、困難な開拓に挑む意義を見出せたのではないだろうか。

山川家のミワ（次女）を通し、桜井家に嫁したあとを訪ねると、幕末の会津藩の人々が戊辰戦争を経て、どのような「その後」を送っていたのか、その事例をより深く具体的に知ることとなった。会津盆地の豊かな自然と相反する斗南の厳しい環境、根室の未開拓の大地に身を置きながらも、藩政時代と同じく子育てや教育に堅実に取り組み、そして着実に歩んできた姿は毅然とした節義あるものであった。会津藩家老山川家への興味は尽きない。今後は、没年など不明な点が多かった常盤（四女）の生涯を調査するとともに、歴史に埋もれた会津藩をはじめとする戊辰戦争で敗者となった女性の生涯を調査し、近代をどのように生きていたのか、掘り起こしていきたい。また、他稿にてミワの四男懋の大正期以降の記録を纏める予定である。

【付記】

本稿を纏めるにあたり、鶴沢佳子氏、岡本静子氏、杉浦恭子氏、杉浦隆之氏、杉浦勢之氏、古川富弘氏（会津若松市）、松永伊知子氏（根室市立図書館）に大変お世話になりました。

62 生没年1875～1947年。長崎出身で明治28年（1895）に東洋英和女学校を卒業したが、明治30年（1897）に女子高等師範学校に入学し、明治34年（1901）卒業した。明治40年（1907）には同校の教授に任官された。女房、説法、鉄砲（家庭・宗教・兵備）が揃っていれば家が守れ、平和であるという「三ぼう主義」で知られる。大正12年（1923）に東京家政学院大学の前身となる家政研究所を開設した（芳賀1990：243～244）。

63 男女同権ではなかったが、山川家では男女問わず年長者は尊敬されていた。例えば、浩（長男）は明治18年（1885）より高等師範学校長に就任していたが、浩宅を訪ねた黒田定治（新潟出身、欧州に留学後、高師教授となった教育者）の話に「長身瘦体清楚にして威厳ある一婦人が將軍（浩）と相対して時事を談じ、教育を論じ、あるいは郷里の学生のことを語っており、其の婦人に対して尊敬を表した。」（黒川編1910：33）とあり、黒田は浩がその女性に対し尊敬を表した言動をするので、学識ある婦人だと思っていたが、のちに姉であると思ったという逸話が残る。

した。記して厚く御礼申し上げます。

【引用文献】

- 青森県史編さん近現代部会編 2002『青森県史』資料編近現代Ⅰ 青森県。
- 阿達義雄 1984『会津藩士の越後流亡日誌』鳥野屋出版。
- 石光真人編 1971『ある明治人の記録－会津人柴五郎の遺書－』中公新書。
- 伊藤廣 1980『屯田兵村の百年』中巻 北海道新聞社。
- 猪苗代町編 1982『猪苗代町史』歴史編 猪苗代町史委員会。
- 猪熊樹人編 2009『くるまいし』24号 根室市歴史と自然の資料館。
- 今泉宜子 2016『明治日本のナイチンゲールたち』扶桑社。
- 遠藤由紀子 2008『近代開拓村と神社－旧会津藩士及び屯田兵の帰属意識の変遷－』御茶の水書房。
- 遠藤由紀子 2010『会津藩家老梶原平馬をめぐる女性－山川二葉と水野貞と「仕事」－』『女性と仕事』昭和女子大学女性文化研究叢書第7集 御茶の水書房（『女性文化研究所紀要』35号（2008年）の掲載論文に大幅な加筆・修正を行ったもの）。
- 遠藤由紀子 2014『瓜生イワの社会福祉事業をめぐる一試論－「家族国家」観と良妻賢母像との関わりから－』（『女性と家族』昭和女子大学女性文化研究叢書第9集）御茶の水書房。
- 大竹正容、森武久他編 2013『評伝山川健次郎－士君子の肖像』山川健次郎顕彰会（高木厚保発行）。
- 葛西富夫 1971『斗南藩史』斗南会津会。
- 梶川梅太郎編 1904『北海道立志編』第3巻 北海道圖書出版合資会社。
- 川上淳・本田克代 1993『私立根室女子小学校校長「水野貞」事跡』『根室市博物館開設準備室紀要』第7号 根室市博物館開設準備室、47～61頁。
- 久野明子 1993『鹿鳴館の貴婦人大山捨松－日本初の女子留学生－』中公文庫。
- 黒川龍編 1910『山川二葉先生』（非売品、櫻蔭会）。
- 小宮京 2016『（史料散歩）山川健次郎のもう一つの「遺稿」』『日本歴史』817号、74～76頁。
- 桜井懋 1967『山川浩』私家版。
- 桜井懋「桜井家の記録」（1968年8月上旬、私家版、桜井国雄翻刻）。
- 桜井懋「吾が家の記録と吾がたどった途」（1968年10月16日、私家版、原本を筆者翻刻）。
- 桜井懋 1974『続山川浩』続山川浩刊行会。
- 塩谷七重郎編 1983『土津神社と斗南』土津神社。
- 尚友倶楽部編 2014『山川健次郎日記－印刷原稿第一～第三、第十五－』芙蓉書房出版。
- 竹川重男 1998『近世社会と女性たち』『福島県女性史』福島県。
- 田澤正敏、秋月一江 2001『十倉綱紀伝』（非売品、田中印刷）。
- 十和田市史編纂委員会編 1976『十和田市史』上巻 十和田市。
- 豊田武監修 1966『会津若松史』第4巻 会津若松市。
- 豊田武・小西四郎監修 1966『会津若松史』第5巻 会津若松市。

- 中村彰彦 2000『逆風に生きる－山川家の兄弟－』角川書店。
- 根室市広報（発行年不明）「からみあう歴史の糸根室と大山柏」（学芸員日誌123、川上淳）。
- 根室千鳥歴史人名辞典編集委員会編 2002『根室千鳥歴史人名辞典』根室千鳥歴史人名辞典刊行会。
- 芳賀登 1990『良妻賢母論』雄山閣。
- 畑敬之助 2004「会津人の倫理観今と昔」『会津人群像』1号 歴史春秋社。
- 布川清司 2000『近代日本女性倫理思想の流れ』大月書店。
- 別当賀の歩み編 1976『別当賀の歩み』「別当賀の歩み」編集委員会 別当賀校開校七十周年記念協賛会。
- 星亮一 1990『敗者の維新史－会津藩士荒川勝茂の日記－』中公新書。
- 星亮一 2003『山川健次郎伝－白虎隊士から帝大総長へ－』平凡社。
- 本田克代 1999「明治時代の根室の人々（4）」カーペンター夫人、桜井政衛・桜井懋『根室市博物館開設準備室だより』14号、19～26頁。
- 山川二葉、雑賀あさ 1894「會津城の婦女子」『女學雑誌』第390号。
- 山川操 1909「十七歳にて會津籠城中に實驗せし苦心」『婦人世界』第4巻第8号。
- 山川三千子 2016『女官－明治宮中出仕の記－』講談社学術文庫。
- 渡辺茂編 1968『根室市史』根室市。

（えんどう ゆきこ 歴史文化学科非常勤講師）